

Title	千八百九十六年以來の物価変動の原因
Sub Title	
Author	増井, 幸雄
Publisher	三田学会
Publication year	1912
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.6, No.3 (1912. 7) ,p.545(165)- 568(188)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19120700-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

我國に於ける物價騰貴の根本的原因は何ぞや

- 六、金利を引上げ勤勉貯蓄を奨励すべし。
 - 七、産業の發達を助くべし。
 - 八、不急の事業を延期すべし。
 - 九、日用品の消費税若しくは關稅を輕減すべし。
 - 十、官邊に於ける奢侈的宴會を廢し質素節儉の風を馴致すべし
- 右に擧ぐるものは貨物の需用と供給とを調和せしむる爲めに政府の採り得る數策なるが、其策の數は無限にして到底其の主なるもののみだも悉く此處に指摘するの餘白を有せざれば、他日稿を改めて、之を論ずることとして、一先づ筆を擱く。

雜 錄

千八百九十六年以來の物價變動の原因

增井幸雄

本篇は千九百十年十二月、セントルイスに開催せる米國經濟協會第二十三回會議に於ける Fisher, Langhlin 兩教授の本問題に關する報告及之に基きてなされたる討議の筆録として Bulletin of the American Economic Association, April, 1911 に載する所なり。『貨幣數量説』に關して論者の間に異論あるは吾人のさきに我國に於て見たる所なるが今本篇を讀むに及んで米國に於てもその然りしを見る、目下物價騰貴の叫、之が原因及救濟策に關して議論の喧しき時に當り参考に資すべきもの少なからずと信じ之を抄譯することとせり。原文大判四十五頁、比較的重要ならざる部分及三四の附圖は之を省略せり。

一八九六年以來の物價

ラ フ リ ン

第一、貨物の代價

(イ) 事實 一八九〇——一九〇九年の物價

の移動

(ロ) 物價の變動の原因

- (一) 金産額の増加
 - (1) 流通せる貨幣
 - 金
 - 合衆國手形
 - 銀行手形
 - 其他の銀貨證券
 - 其他の貨幣
 - 小切手
 - 銀貨
- (2) 銀行準備金
 - 金
 - 合衆國手形
 - 其他の銀貨證券
 - 其他の貨幣
 - 銀貨
- (3) 信用と物價
- (二) 貨物生産費の變動
 - (1) 關稅及租稅
 - (2) 勞銀、勞働組合
 - (3) 農業狀態(食物、棉花等)
- (三) 獨占業及トラスト
- (四) 一般的奢侈

第二、有價證券の代價

(イ) 事實

(一) 一八九〇——一九一〇年の二十鐵道及十二工業株の代價

(二) 正金準備金

(三) 金の國際的移動

(四) 預金に對する貸付の比例

(ロ) 有價證券の代價變動の原因

(一) 金價の下落、流通の分量

(二) 利潤

(三) 投機、信用膨脹

(四) 過發

吾人の今や論せんとする所は一八九六年以來の物價に關する事實の記載又はその變動の説明のみにあらずして實に物價に關する一般的貨幣

學說なり、而して論述の範圍は貨物の代價の變動のみならず有價證券のそれをも包含せざるべからず、故に議論は附表に示せるが如く自ら二部に分たる、從來は貨物及有價證券の代價の變動の原因は同一なりと考へられたれども少しく思を致す時は兩者の間に大なる相違の存することを知り得べく又前掲附表によりても明に觀取し得らるゝ所なり、今は右附表の全部に就て論ずるの暇なきを以て本論に於ては第一、貨物代價の變動に關し、物價の平準に影響を及す諸原因中、(ロ)の(一三四五)即ち、金産額の増加、獨占、奢侈及投機のみを就て論じ他は省略するとせむ

左記の諸提案は物價變動の原因の基礎たるべき物價論の眞髓を包含するものなりと信す

一、貨物の代價は之と交換すべき一定の標準物の分量によりて計らる

二、代價の變動は貨物の供給(生産費を含む)状態に影響すべき變動にも基因すべく又金の需要供給の變動にも基因すべし

三、同一の状態の下に於ては金の増加は物價を引上ぐるの傾向あり、されど金の供給増加するも新なる需要發生して之を相殺する時は物價變動の原因は去つて之を貨物の生産販賣に關する諸影響に求めざるべからず

四、貨物に對する有效需要は購買者の購買力によりて制限せらる、この購買力は流通せる交換媒介物に等しからざることを猶社會に於ける交換し得べき富の總額が流通せる貨幣の總額に等しからざるが如し

五、代價の一般的平準は個々の代價より獨立せるものにあらず、何となれば個々の賣手及買手の形成する幾多の個々の代價の結果たらざる一般的の平準なるものなきを以てなり、されど物價を表はす標準を自ら既に一個の貨物な

るを以てその價值に影響すべき原因に關する者は之に適用せらる

六、競争代價は市場に於ける驅引によつて定まるものにして一旦代價定まる時は貨物を移轉すべき信用媒介は容易に發生す、代價は交換媒介物の需要に先つて決定さるるものにして代價を表はすべき標準物を即座に必要とするものにあらず

七、貨物に對して貨幣を提供することはその前に作用せし代價形成の諸勢力の結果にしてその原因にあらず、最初貨幣を提供する時は實際は貨幣を有せず、唯處分し得べき貨物を基礎として支拂の際に發生すべき購買力を提供するに過ぎざるなり

八、信用は貨物を標準金にて表はし以て互に交換するを得しめ交換媒介としての金の需要を著しく減少せしめ著しく長き期間に於ては物價下落の傾向を沮止す

九、銀行の貸付は所有資本に制限せられその大小は資本の大小による、而して合理的の貸付の需要は貨物の交換抵當物件及投資の機會と共に變動す。次に銀行は貸付に際し要求拂の債務に對して一定割合の準備金を所有せざるべからず、資本金と手許有高とは貸付の相對的分量を定め貸付額とその結果として生ずる預金の額とは準備金の額を定む、銀行の準備金は貸付作用の結果なり、金が増加するも事業が之を要求せざる限りは貸付を増加せざるを以て事業の膨脹は必ずしも金の増加の結果にあらず、銀行の資産及貸付が多き時は合法の準備金に對する需要を増加す、故に曰く、現状の下に於ては銀行の準備金に新なる金を使用するもそれは事業膨脹、物價引上を來すべき重要な勢力にあらずと、

十、現に存する金の量が多大なるを以て假令多額の産出あるも一般貨物に關聯しての金の世界的價值を著しく變動せしむることなし、故に

急速なる代價の變動は貨物市場に於ける諸影響貨物需要の投機的變動及事實を離れたる心理的影響に歸すべきものなり。

三

物價平準に於ける變動の原因を發見せんとするに當ては物價を言ひ表はすべき金本位に影響する原因を解決するを要す。物價の平準は合成物にして之が發生の原因多し、世界に於ける金の供給増す時は他の事情同一なる限りはその價値を減じ物價を騰貴せしむるの傾向あり、故に或時期に於ける物價平準の變動の原因を知らんとするに當つては金の増加の事實を述べ然る後『他の事情』の影響を研究せざるべからず

先づ金に關しその貨幣用の需要と非貨幣用の需要とを檢せむ、非貨幣用の需要を見るに美術上の消費に關する統計は精確ならず、一四九三—一八五〇年間に於ける世界の金の總産額は三十一億五千八百萬弗なるも一八五〇年に於て

利用し得べかりし額は知るを得ざるも恐らくは二十億弗を出でじ、一八五一—一八九五年間の産額は五十六億四千一百万弗にして美術上の消費を年々五千萬弗とし都合二十二億五千萬弗を差引く時は殘額三十三億九千二百万弗なるべし一八九六—一九〇五年間の産額二十八億九千九百萬弗にして消費額十億弗を減する時は十八億九千九百萬弗となるべし、一九〇六年より一九一〇年に至る四ヶ年の産額は十六億弗にして消費額を差引き十二億弗を得べし、かくして一九一〇年に於て利用し得べき金の額は八十八億九千萬弗となるべし

金に對する貨幣上の需要は一の特徴を有す、世界の商業國は金の供給上の困難の除去せらるるや否や金貨制度を採用せんとするの傾向あること即之なり、一八五三年米國先づその例を開きてより獨、澳、印度、ラテン同盟諸國之に従へり、當時は金の騰貴従つて物價下落の時代な

りしを以て前記諸國の金の需要は物價の變動とは何等の關係なき思想に基けるものなりしが金の採用の運動は依然として進行せり、加ふるに一八五一—一九五年間に於ける金の産額の増加は當時の現存額に比して著しく多かりきこの大なる金産額こそ諸商業國民を満足せしめたるものなれ、今期（一八九六—一九〇九）に入りても金本位運動は猶行はれたり、さきに諸國が金を採用せしは物價下落の時代なりしに反して此時は物價騰貴の時なりしにも係らず露、日、南米諸邦等は銀を去り亞細亞、阿非利加諸地方は新に金を採用せり、加ふるに英米の如く久しく金本位を採用せる國に於ても商業の増進と共に金を要する事益々大となる、金に對する最近の需要は恰も新に増加せる供給と歩武を等しうするが如くなること及ロンドンへ到着する金は歐洲其他の小國の争て取得せむとする所なることは充分に考慮に入れざるべからず

貨幣用及美術用の金の需要の外にロスチャイルド家等の私人營業者の有する多額の金をも考へざるべからず、暹甸、佛、伊、米（クリーブランド執政時代）の諸國はかゝる貯蓄よりその供給を受けて而もその準備を著しく減ずることなかりき

以上吾人は常に變ずることなしと考へらるる『他の事情』の中に就て金の需要の一要素を研究せり、物價騰貴せる最近時代（一八九六—一九〇九）に於ける金の需要が物價下落せる前時代（一八七三—一九六）に劣らざることを示す幾多證據の存するものあるなり。

四

一八九六年以來の物價騰貴の原因は未だ研究せざる『他の事情』の中に之を求むべきが如く見ゆ、されど是等の點（第一、（ロ）、（二三四五）に就ては詳論の違なし

關稅、租稅、勞働組合及高き勞銀、生産増加

を來すべき農業状態の變動等は明白、又敷衍を要せず、一八九七年デングレー條例の通過後多數の物價は急激に騰貴せり加ふるに勞銀、生産費の増加は延て代價の騰貴を惹起せり、されど物價の騰貴の最も重なる原因は農業状態の變動に伴ふ食料品代價の増加にして新なる金の供給とは全く獨立して作用せる『他の事情』の一なり一八九〇年に於ける物價下落によりて示される産業の利益は關稅と農作不良と最近の農業に於ける高き生産費とによりて失はれたりと云ふも過言にあらず

次に實際の生産費と消費者の事實支拂ふ代價との間に於て代價決定の作用をなす諸原因をば（三四五）に就て研究せざるべからず獨占的企業の存在の理由は代價の制馭及競争の防止にあり、然し生産費は代價と何等の直接關係なき今日の産業組織に於ては獨占は取引に際してその堪え得る限りの最高額を課するの餘地あり。富

の増進の結果として小賣商は高價を貪る、富者は之を意に介せざるも貧者は如何にすべき、富者の奢侈は一般經費を引き上げたり、所得小なりと雖も代價に相違あるべからず、賣手の要求するが儘に支拂はざるべからざる時代に達せり、組織的の販賣に對する又組織的の購買を以てせざるべからざるなり。

加ふるに生産費の増加、聯合に基く物價の騰貴は投機に好機會を與へ更に一層の騰貴を來し直接には聯合の利益となり間接にはその産業の株券に投機を生ず。投機の状態は金の供給に先ち又は之と獨立して發生消滅す。

物價平準最近の變動及其原因

フイシヤ

予は從來の『貨幣數量説』は根本に於て正しと信するものにしてラフリン教授の提案の大部分に賛成する能はず、拙著『貨幣の購買力』第

十二章中必要と認むる部分を再録して諸君に配布せしが之は物價平準の理論的決定方法を論せんとするものにあらずして過ぐる十五年間に於ける物價の騰貴に關する統計を數量的に説明せんとするものなり。

予の考によれば物價平準の因果の理法は各々の貨物の代價の因果の理法とは全然異れり、個個の貨物の需要供給によりて物價平準を決定すること能はざるは猶個々の波瀾によりて潮汐の平準を決定すること能はざるが如し、物價と物價平準とは全く異り従つて異なる説明を要す、各需要者供給者は貨幣の單位に於てその需要供給を表はし従つて貨幣の購買力を前提とするを以て貨幣の購買力に變動あれば各々の需要供給にも變動を生ず、個々の代價は一般的物價平準を豫想し前提とするを以て一般的物價平準よりして個々の物價に論及するを正しき順序なりとす。

需要と供給とは個々の代價を論ずるに與つて力あるも一般的物價平準を論ずるに當つては然らず、後者は「 $M'V + M'V' = P$ 」なる交換の方程式によつて定まるものにして是即「貨幣數量説」を多少の考案を加へて代數的に表はすものなり、この式に於てMは流通せる貨幣の分量、Vはその流通の速度、M'は小切手支拂に應すべき預金額、V'はその流通の速度、Tは貿易の分量（物價平準に關せず、換言すれば或る物價平準の基礎と考へられたる）、而してPは方程式に於ける之等五個の數量より生じ来る所の一般的物價平準を表はすものとす、此の方程式のみにては何れが原因にして何れが結果なるやを知るを得ざれども或る考案（此處には論せず）によりてPは方程式より算出し得らるべし、平常の場合にありてはMの増加はM'の増加を伴ふもV'又はTには何等の影響をも及ぼさず、故にPはMに正比例して變動せざるべからず、方程式

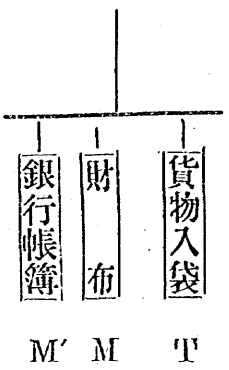
$$P = \frac{M'V + M'V'}{T}$$

の各項間の因果關係は多くの人によりて論せられたるが事の結末は從來の「貨幣數量説」の依然として眞なること及普通の状態に於ては物價平準は流通せる貨幣の數量と全然比例すること歸着す、勿論Pに影響する方程式の五要素が悉く同時に變動することあるを以て或る時期の間に於てMがPに影響する唯一の要素なりと確言するものにはあらず、之等の要素はそれ以前に存在する諸原因の結果たるものなるがその原因たるやM'V'及Tの中一個若くは數個を通じてなすにあらずんば一般的物價平準に何等の影響をも及し得るものにはあらず

方程式の是等五要素は統計によりて得らるべきを以て、物價平準の因果關係をば交換の方程式を通じて作用する是等五原因に歸するの説を正しと假定する時はPの値は

なる公式によりて算出するを得べし、かくして得たるPの値をば勞銀及有價證券の代價を相當に斟酌して勞働局の統計によつて示されたる物價平準の實際の統計と比較する時は兩者は實によく一致し「貨幣數量説」の確かなること及統計の正確なることを知り得べし。

予は方程式の六個の項を聯結する方法によつてこの統計的結果を示すに次の天秤の圖を以てせり



上圖に於てMを表はす財布とM'を表はす銀行帳簿とは支點の左方一定の距離の點に懸り其距離は兩者

の流通の速度即V及V'に一致せしめ而して右方にはTを表はす貨物入袋懸りその支點よりの距離は物價平準Pを表はす、此の圖に於てMの重量が増加する時は他の事情の同一なる限りはT

を猶右方へ送らざるべからず、即Pの増加を來すべし、同様にPはM'V'の増加又はTの減少によりて増加すべし

過ぐる十四年間に於て是等の六要素に生じたる變動を見るに流通貨幣は二倍となり小切手支拂に應すべき預金は三倍となりその流通の速度は各稍増し而してTは二倍となれり、即ち知る是等五要素に於ける變動の結果として物價は約三分ノ二騰貴せることを、一九〇七年の恐慌時に預金が非常に増加したるは事實なるもその増加の大部分は流通貨幣の分量の増加に歸すべきものなり、唯前者が後者に關聯して増加せる限り預金の増加は物價騰貴の獨立の原因と認め得べし、故に物價に影響する次の五原因、即

- 一、流通せる貨幣の數量(M)
- 二、貨幣に關聯して考へたる、小切手支拂に應すべき預金額(M')
- 三、一の速度(V)

四、二の速度(V)
五、貿易の分量(T)

の相對的重要の度を思考せざるべからず、而して最もよくこの目的を達する方法として「若し是等の中何れか一が年來不動なりしならむにはその結果は如何なるべきか」を研究して次の結果を得たり、曰く、一九〇九年に於ける物價平準は(一)流通貨幣が變動せずんば實際よりも四割五分低く(二)相對的預金が變せずんば二割三分低く(三)貨幣流通の速度が變せずんば二分低く(四)相對的預金流通の速度が變せずんば二割八分低く而して(五)貿易額が變せざりならんには實に十割六分高かりしならんと、之によりて見れば始めの四要素の變動は物價を高むるの傾向ありしに反して貿易に於ける變動は之を下ぐるの傾向あり而して前四者の相對的重要の度は上記の百分率にて次の如く示さるべし

V の重要の度は 一

M'	M	
二二	二八	四五

五五四

即貨幣の分量増加の重要の度は他の何れにも約二倍す、この研究はあらゆる物價引上原因の凡てを含む、思ふに世間物價平準を引上ぐる原因は無數にあるべしと雖もそれは上記四原因又は第五の貿易分量(最近物價を引下ぐるの傾向ありし)を通じてのみ作用し得るものなり、

故に吾人は結論して曰く、最近十五年間に於ける物價騰貴の主たる原因は流通貨幣の増加にありと、而してこの貨幣の増加は疑もなく金産額の増加によるものなり

同様に物價引上の他の三要素の背後には其外の物價引上の原因の作用あるを發見せむ、特にM'即小切手支拂に應ずべき預金額の増加は人口の都市集中によるならん、歐洲諸都市に於ける流通の速度に關するピエールデゼツサールの統

計は人口の密度大なれば大なる程銀行勘定愈々活潑に銀行預金の流通速度益々大なるを示す

この研究の副産物として國內の取引の現金及小切手によりて行はるゝ正確なる比例を得たり即始金にて行はるゝ取引總額は一八六九年には一割四分なりしもの一九〇九年には九分となれりかくて吾人は全國の取引の一割が現金にて行はれ九割が小切手にて行はるといふ實業家の言の眞なるを發見せり、

貨幣と物價 (討議)

デイト、エフ、ハウストン

物價騰貴の聲及之が原因に關する諸説紛々たること今猶四十年前に於けるが如し、予はラブリン教授の議論の綱要(附表)を一見するやケヤンズの『物價騰貴に關する説は甚だ多けれども多くは主として金の新發見に歸するに一致せるもの、如し、或は一般商業の増進、同盟罷工の

影響、需給關係の變動等を擧げて之を否認するものあるも根本的に誤れり、物價騰貴の説明は生産費(生産に於ける實際の諸困難)の増加又は貨幣取得の費用の減少の二の外に出づるを得ず」との名論を想起せずんばならず、予は物價を高むるの傾向ある、貨物生産費に關する諸原因の作用ありしことを認むるも而もラブリン教授に反して一八九六年以來の物價騰貴の主たる原因は金産額の著しき増加及信用の著しき發達に存することを主張せんと欲するものなり

金の産額は(單位百萬弗)

一四九三	一八五〇	三、一五〇
一八五一	一九〇五	五、六四一
一八九六	一九〇五	二、九〇〇
一四九三	二八九五	八、八〇〇
一八九三	一九〇五	一、七〇〇
一九〇五	一九〇九	一、七〇〇

五五五

一八九六年以來の金の總額は一九〇九年末に於て四十六億弗となりアメリカ發見以來一八九五年に至る四百年間の生産額の半ば以上に達せり十五年間にかくの如き多量の生産ありしより見れば之等の金が盡く貯藏されたりとするも物價に大影響を與へたりとの推定を生ず、一八九五年に至る四百年間の金の大部分が失はれ生産當時よりは著しくその額を減少せる事を考ふる時は金が過去十四年間に於ける物價騰貴に影響せる主なるものなりとの推定を強むるものあり

一八五〇——一八七三年は佛國を除くの外は西洋諸國に於ては金の増加著しからざりしにも係らず物價騰貴せり。一八七三——一八九三年は二十四億弗の金の産出ありしにも係らず物價下落せり、此時期は生産費減少により産業甚だ活潑に金貨本位亦採用されし時にして新金銀は盛に先進後進の諸國に送られ然も全く需要を満足能はざりき。一八九六年以後は合理的貨幣制

度の樹立によりて信用恢復し金は増加し産業は繁昌したれども十九世紀末に行はれたるが如き發達を見ず、予は生産費減少が沮止されたるのみならず増加したることを認むるものなれども未だこの増加が最近十四年間に於ける物價騰貴を説明するに充分なるを見ず、食料品の増加が人口及需要品の増加に伴はざりしとの事實は最も有力なる反對説なれども之を以て果して充分に説明し得らるべきや、殊に米國及諸外國に於ける農業の發展を見る時は益々疑なき能はず

最近十四年間に於て最も多く金を取得せしは米、佛、獨、英にして就中信用組織の最も發達し金の效果最も増進せるは米國を以て第一とするは衆の一致する所なり。米國造幣局長の報告によれば一八九五年に於ける金の蓄積高は五億二百萬弗なれども一九〇九年には十六億千二百萬弗にして十四年間の増加は過去五十年間の増加に殆んど二倍す、而して諸種の貨幣の總額は

一九〇六年——一九〇九年間に十五億弗より三十一億弗に、法定準備金は四億二千萬弗より八億六千萬弗に、手許現金は八億七千五百萬弗より十三億七千萬弗に、而して小切手支拂に應ずべき預金は二百六十萬弗より一躍七十億弗に増加せり、予はかくの如き偉大なる増加發達は物價騰貴の主要なる説明を提供すべしと信ず

關稅の影響も否認すること能はずと雖もその率は南北戰爭當時と變りなきこと、保護關稅なき國に於ても物價騰貴の傾向あること並に關稅の効果は昔日の如く大ならずその効果の大なるは物價の騰貴著しからざる貨物に對してなることを忘るべからず

勞働組合及獨占の物價騰貴に影響ありしことも否認せず、後者が影響を與へたる事は諸種の證據の示す所なれども前者に關しては確ならず勞働組合の政策にはその團體及社會に有害なるものあり又健全にして經濟的利益を來すものも

あり、差引利害何れが大なりやは確ならず

奢侈に關する議論は古今其跡を絶たざる所なるが今代に於て奢侈が以前よりも一層甚しきや否やは不明なり、奢侈即ち經濟上の徒費の最も甚しき戰爭及その後患は近來十五年間全くその跡を見ず

要之、主たる西洋商業國に於ける金の蓄積高は一八九五年には五百萬弗を超えざりしもの次の十四年間に於て殆ど之と同額の増加をなし其中數箇國は著しく信用制度を發達せしめたり、是等の事實は當然金が物價に影響したる主たる要素なりとの強き推定を生ず、而してこの推定を覆すに足らざるべき他の推定は未だ提唱せられず若し現狀の下に於て金が物價騰貴を生ずる重要な要素にあらずとせば予は如何なる状態の下に於てこの提案が正當に認めらるべきや容易に知るを得ざるものなり。

イー、ダブリュー、ケメラー

予はフイツンヤー教授の將に出版せんとする物價平準に關する著書の原稿を讀むの機會を得たるが其の主たる部分に就ては全く同感なるも微細なる點に於ては多少の除外例を設けざるべからず、例へば現金を以て行はるゝ取引の分量に關する割合の如き銀行が小切手使用を過大に報告するの傾向あるを斟酌せざりしものゝ如し流通せる貨幣と物價との關係を示すフイツンヤー教授の公式は全然予の同一なりと雖も教授は此公式の説明に於て最も重要な營業上の信用に注意せられず、預金と銀行の準備金との割合如何は營業上の信用の職とする所なり。

個々の商品の代價と一般的物價平準との間に分界を劃することは服し難きのみならず教授の貨幣學說と矛盾す教授は個々の代價は一般的物價平準を豫想すと云ふも予は兩者の間にかくの

如き區別あるを認むること能はず、一般の物價は個々の代價の複合又は「綜合寫眞」たるに外ならざるなり。

ラフリン教授の十個の提案に就て云へば始めの五個は普通の概論にして然も教授の原著よりして豫想せらるるよりも一層教授を『貨幣數量説』に近づかしめたり、第五案に『貨物の代價は之と交換すべき一定の標準物の分量なり』とあるその標準物にして本位貨幣を意味するものとせば正しきも若し地金を意味すとせば全然誤れり自由鑄造の制度の下に於ても鑄貨と地金との間に價値に相違あるを以てなり。第四案購買力が流通せる貨幣の量と同一にあらざること就ては世に異論なかるべし。

第六第七案を合せ見るに『代價決定は貨幣の需要に先だつものにして貨幣の提供は以前に作用せる代價決定の諸勢力の結果なり』と論せらるゝもこは皮相の觀察より來るものゝ如し、貨

幣提供も貨物の提供も第一歩にはあらずして實はその前に各貨物に就ての主觀的價格なるものあり、競争、選擇及適應作用の結果として之等の主觀的價格の或るものが發展して市價となり當事者雙方を利するの代價定まり交換起る、市價は物貨に對して支拂はれたる金額にして要求され提供され又は約束されたる金額にはあらずるなり

教授の第九案にも服し難し、『準備金は貸付作用の結果なり』との前提は危險なる半面の眞理なり他の銀行業務よりも生じ得べければなり、猶『金の供給増加の事實は、それ自身貸付を増加せしむるものにあらず、先づ銀行が資本を左右するの力を有するに於て始めて然るものなり』との前提も人を誤り易し、金の供給を自らば貸付を増加せしめざるも普通かゝる結果を伴ふ、銀行の割引歩合と準備金の状態は貸付勘定に影響すべき有力なる要素なり、氏の前提は

健全にはあらず、假令健全なりとするも之よりして『事業の膨脹は金の供給増加の直接の結果にはあらず』との結論は生じ來らず、正常なる因果の關係は金の産額増加する時は貨幣用の金の分量を著しく増加すといふにあり、個人の貨幣所得増加する時は貨幣單位の價値の評價を下げ主觀的價格は上り其結果代價は騰貴す、銀行は個人より預金を受取り準備金増加する時は割引歩合を下げて貸出に力む、コールマネーの増加によりて投機市場は刺戟され信用と企業との膨脹を見、かくして程なく新なる金は以前より高められたる物價平準と附け景氣との中に吸収せらる、前世紀に於けるカリフォルニア及オーストラリアの金鑛發見後の状態と最近の著しき金産額増加の結果とは實にかくの如くなりしなり

教授の最後の點は一八九五年以來の新なる金の供給殆ど新なる需要と等しきものあるを以て

爾後の物價の變動の原因は金産額の増加にあら
ず却つて之を變動したる『其他の事情』中に求
めざるべからずと云ふにありてこの結論を支持
せんが爲に次の二論をなせり、即第一に『金の現
存額大なるを以てその供給に著しき變動を生ず
るも貨物に關聯しての金の世界的價值に著しき
變動を生せず、故に物價に於ける急速なる變動
は貨物市場に於ける影響、貨物需要に於ける投
機的變動又は事實を離れて作用せる心理的努力
に歸すべきが如し』と、予は之に答へて一八九
五年以來の金産額は全供給額の中甚だ大なる割
合に當ると云はんと欲す、造幣局長の補正せる
ゾエートペーヤの數字によれば一四九二——一
八九六年間の金産額は約八十九億八千二百萬弗
にして一八九七——一九〇七年間の産額は三十
五億千三百萬弗なり、即ち後の十一年の産額は三
その以前の四百五年間の産額の三割九分以上に
當る。六大國に於ける一八九七年と一九〇七年

との標準價格指數を比較する時は一般的物價平
準は次の如く騰貴せり

米 國	四四、四%
加那陀	四三、七%
英 國	二九、〇%
佛 國	二三、三%
獨 逸	三〇、八%
伊太利	二三、四%

右六國の平均を取る時は三〇、八%即三割八厘
の騰貴を示す、工藝用の金の分量の以前よりも
減少せること及銀行の發達は貨幣の節約をなせ
ることを附加して考ふる時は事業は大に膨脹せ
るにも係らず物價に著しき増加を期待し得べき
ことを知るを得べし

ラフリン教授の最近の物價の變動の主因は金
産額の増加にあらずとの説の支持の爲めになせ
る第二の論は嘗て見ざる妄斷の最も甚しきもの
なり、曰く『…新に金貨本位に向ふ國及既に之

を採用せる諸國に於ける金の需要の増加は約三
十億弗に達し一八九五年以來の新なる供給に殆
んど等しからんとす…』と、勿論金に對する
需要と供給とは他の貨物の需要と供給とが市價
の單位に於て平均するが如く相平均するものな
り、然し金の需要と供給とを相平均せしむるこ
そ實に一般的物價平準なれ物價平準の高きこと
は新なる金を世界に於ける流通中に吸収したる
ことの表彰なり。

ジエー、エフ、ジョンソン

貨幣の價值はその需要及供給によりて定まる
の事實に關しては衆論の一致するの傾向あるを
見る、予はラフリン教授の一般的物價平準は貨
幣の需要及供給によりて定まると云ふ結論には
同意するもこの結論に達する前提には賛成する
能はず、教授は『物價の變動は貨物の需要及供
給（生産費を含む）にもよるべく又金の需要及

供給にもよるべし』と云はれたるがこの言は個
々の代價に就ては眞なるも一般的物價平準の變
動に就ては眞ならず、單に貨物供給の増加は金
の需要を増加すとの一理由によりて物價平準を
引下ぐ、教授の言は金の需給に何等の變動を生
せずして一般的物價平準に變動を生じ得べしと
論ずるが如く見えたり、果して然りとせば絶對
に支持すること能はず。

教授は『金に對する新なる需要が新なる供給
を相殺する時は假令物價に變動を生ずるもその
原因は之を貨物の製造販賣に關する影響に求め
ざるべからず』と云はれたるも第二の假定は起
り得べからず、何となれば新なる需要が新なる
供給を相殺する時は一般的物價平準に變動を生
せず、從て原因を他の條件中に求むべき事實を
生せず、物價の平準の變動とは金の價值に於け
る變動を意味すればなり。

ラフリン教授の代價形成に關する説明は不完

全なり、物價變動の原因は之を物價形成の諸勢力中に求めざるべからずといふは正しけれども小麥の代價は市場の驅引によりて定まるといふは誤れり、驅引にて定まるとは小麥の價値のみ、小麥と貨幣との價値に關する評定に於て賣手買手の間に一致を見るまでは代價は決定せられず代價決定に於て貨幣の需要供給の重要なものは小麥の需要供給の重要なが如し、教授は貨幣の提供は代價決定の徑路の結果なりといふも何れの市場に於ても代價の低きは其より以上の代價にては全供給額を吸収すると能はざるにより、その高きは買手が高き價を拂はむと欲するによるラフリン教授は信用と貨幣價値との關係に於て『銀行の貸出力は資本及預金によりて定まり従つて金の供給増加はそれ自身貸付の増加を來さず』と主張し商業の膨脹は金の供給増加の直接原因にあらずと云はれたり若し金の増加が必ずしも貨物の交換を増加せしむるものにあらず

との意ならんには正しきも教授の意は茲に非ずして銀行は事業の狀態が之を要求するにあらずんばその貸付を増加すること能はずとの理由を以て銀行の準備金として新なる金を使用せるとは物價引上の原因たる能はずと論せらる、かくの如きは現在の實業社會に見る能はざる所、銀行家は資金に餘りある時は利率を引下げて貨幣の需要を喚起すべきを以てなり。

エム、エス、ワイルドマン

フィッシャー教授の所論は代價の徑路と貨幣及信用具との間の聯絡を完全に示すとすも予は之等の諸分量の内何れを正當に原因とし何れを結果と認むべきやを知ること能はず、金の價値の變動と一般的物價平準の變動とは相互的なるを以てMとPとの因果關係は否認することを得ざるべし、されどM、V、Vに於ける變動は單にM及Pに於ける變動の結果たることあるべきにあらずや、何故に獨りPのみが受働的なるや、

抑又何が故にPを受働的なりと云ふや

物價の騰貴、即金の價値の下落の原因を知らんとするに當り、『貨幣數量説』はその解決をなせりと云ふことを得ず、寧ろ金が増加してその價値減じ信用の分量と流通の速度とが増加したること及是等の價値及分量に於ける變動は物價平準及貨物交換に於ける變動と比例して相共に生じたることを示すに過ぎず

かく見來ればラフリン教授の研究方法及議論を全然承認せざるを得ず、即吾人は金に對する需要供給の事實と、貨物に對する需要が金又はその代表物の提供によりて表はさるゝ限りは貨物の需要供給に關する事實とを探索せざるべからず、M、V及Vは金に對する需要の一要素と認めらるべきを以て教授の議論支持の爲めには代數式を必要とす。

ラフリン教授の研究方法を採用することは必ずしもその結論をも採用することを含まず、こ

の方法によれば、用語は數學的記載又は統計的説明に適せざるを以て精確ならず、或者は需要徐々に増加して金下落せずと云ひ又或者は金の供給額に増加してその價値下落しそれ丈物價の騰貴を來せりと云ふ、共に誤れり、吾人は價値形成の要素の意味に於ける金の需要に關する信賴すべき事實を有せずと雖も結局使用せる金の統計に基する需要を計るの外はあらず、若し美術上流通上及銀行準備金上に於ける金の消費がその生産と相伴へる事實を證明し得るものあらば金の價値は供給増加の爲に下落せざりしことを承認するものなり。

されど消費統計は價値形成の意義に於ける需要に何等の手懸りをも與へず、供給が一定の度を超過する時は著しく代價の下落するもの即ち所謂需要に伸縮性なきものと代價が供給の増加と比例して下落するもの即ち需要に伸縮性あるものとの區別あり一概に論ずる能はざるを以て

なり、金に對する需要は伸縮性を有するや將又之を有せざるや

若し金の需要が伸縮性を有せずその需要曲線が一定の供給以後に於て急に下降すること證明せらるゝ時は物價騰貴の原因は貨物生産の状態の中に求むべからずして却て金の生産の状態中に之を求むべし、加ふるに此場合にありては年々の産額が現存の蓄積額に對して僅少なる比例を保つとするも金を廉ならしむるの原因を容易に發見することを得べし、然れども若し金の需要が伸縮性を有し供給増すも價値に何等著しき變化を生ぜずして需要額を増加する時は吾人は去つて物價騰貴の原因を直接に貨物及勤務に關する諸影響中に求めざるべからず、

故に以上二種の記載方法は共に猶缺くる所あり、代數的説明は各項間の關係を示すも物價騰貴の原因を示すことなく、直接に金の價値に關する議論は價値形成の要素としては依然として

未知數たる金に關する考慮を包含す。

テイー、エヌ、カーヴアー

フイツンジャー教授の優秀なる歸納論はその公式の正確なるを證明したれどもそが果して教授自身の論を支持するや將又ラフリン教授の所論を支持するやに就ては疑あり、例へばPがMの原因なりとせばラフリン教授の説を支持すべくこれ實に或る程度まで實際に起り得べき所なり人口増加し土地の供給少き時は農産物の價値高まるべし而して一定の農産物を取引せんが爲には從來よりも多額の貨幣を要す、若し金以外の貨幣生ぜざる時は金の蓄積は鑄貨となるべくかくして世界の金産額増加せずとも貨幣として使用せらるゝ金の比例を大ならしむ、これは實際に起り得たる事柄にして假令この傾向を一層強むる所の金の供給ありしとは云へこの事實は本問題の一要素たりと信す。

エフ、ダブリュー、タウシツグ

予はフイツンジャー教授の賞讃すべき論文は學界の富を増したるものとして慶するものなり

然し思ふにフイツンジャー教授の方程式中のM(預金)は全然獨立のものにあらずして或程度に於てTの函數なり、教授は之をM(方程式のM即ち流通せる貨幣にあらずして他のM即ち銀行準備金中に於けるM)のみに依るものとなして預金が銀行の準備金に依頼するの事實は附加すべき條件即ち一般にこの依頼の事實は長期に亘つて現はるれども銀行營業の變動と好景氣の際に多額の預金を得んとするの傾向とによりて影響せらるゝことを示したるものなり、されどMとTとの間にも或る關係の存するあり、貿易の發達は短期間、否數年に亘つて預金を増加するの傾向あり、予は決して交換の各行爲は自動的に交換の媒介を供給すとの意味に解せらるゝヲ

フリン教授の理論に論及せんとするものにあらず、近代の預金銀行の機關は長期の間預金をして取引及之に基づく貸付と並進せしめ預金に伸縮性ある根源を供給するが如く見ゆ。最後に預金の増加は銀行の有する現金を限度とするも預金及貸付をば取引と同じ早さにて又は之よりも一層早く増加せしむるの伸縮性なきにあらず、而してこの事實は好景氣の際に於ける物價騰貴を説明するに與つて力あり、この現象は手形交換所貸付に於て最も著しく表はるゝ所にして紐育の如き中心地に於て殊にその然るを見る、かゝる地方にして始めて取引はそれ自ら準自動的に交換の媒介を供給す、ラフリン教授をして支持すべからざる極端説を採らしめたるは此の種の作用を不當に普遍化したるに基因せるものなりと思惟す、MとTとの間に於ける一時的相互作用を多少斟酌することはフイツンジャー教授の説を完ならしむるに必要なり。

アール、エッチ、ヘッス

フィッシャー教授の公式 $MV + M'V' = PT$ は購買と支拂との數學的均等を示すに近し、敢て近しと云ふ、蓋し M にして流通信用の分量を正確に示すとすれば公開せる銀行勘定のみならず日常支拂資料を構成する銀行手形商業手形保證小切手等をも含まざるべからず、即ち M 及 M' はそれ／＼流通せる法貨及貨幣以外の流通信用を表はすとし V 及 V' がそれ／＼ M 及 M' の流通の速度を示すとせば交換の方程式は數學的の均等を表はすも個々の要素中何れか二つ例へば M と P 又は M' と PT との間に於ける因果關係又は統計的關係を示すことなきを以てなり、然りと雖も MV と V' 又は M と M' とは互に相補なるものにして T 、 P 又は T に於ける變動並に T の要素たる貿易の材料及反覆の頻度に於ける變動は方程式の左方に於ける何れかの項の變動によりて平均せ

らるべし、同様に MV 及 V' が反比例の變動をなすも PT は何等の變動をも生ぜざる事あるべし。

タウシツグ教授の指摘せる M と T との關係は近代の商業社會に於ては必ず事實となりて現はるゝものなり、商業の行はるゝ徑路を知れるものは貿易をその二要素即貿易の材料及反覆の頻度とに分つ時は後者は信用の流通速度 (V) に比すべきものなることを承認せむ。

流通信用の速度及分量は貿易の材料の分量及價值と共に變動するを以て數學的に云へば前者は後者の從屬的函數なりと云ふは争ふべからざるが如し、この關係を認むる時は交換の方程式に於て PT は V を決定する重なる事項となるべく、紙幣が商業手形保證の下に發行せらるゝ限りは M を決定する重なる事項となるべし。

P はフィッシャー教授の方程式の他の凡ての項に從たるものにして V 及 V' は交換の機關の狀態及組織によりて定まり M 及 M' は PT より自然に

發生すとの結論は明なり、故に物價及物價平準を決定する重なる要素は貨幣及信用機關そのもの以外に於て之を求むべきなり。

代價決定の徑路、性質及順序並に代價の變動の背後に隠れたる實際の諸勢力に就てはラフリン教授と全く同意見なり、

ラフリン

前辯諸士の指摘されたる二三の點に就て簡單に答辯せむ、先づフィッシャー教授の $MV + M'V' = PT$ なる方程式は物價平準の記述たるに止まり何等の解決をも與へず、例へば P の増進は M の増加に附隨するものにはあらず、何となれば商工業 (T) の發達は銀行の預金及貸付 (M) の増加の原因にして方程式の兩側に於て相殺するを以て必ずしも P の増進を伴はざればなり、此方程式は又原因を示さず、一八七六—一八九六年間に預金は五六倍の増加を來したれども

物價は下落せり、以て M' は物價騰貴の原因たることを證明されたりと認むる能はざればなり、

次に教授は流通中の貨幣 M と小切手支拂に應ずべき預金 M' との間に因果關係を立せんとするもこれ根據なき所なり、誤謬の根源は個人の預金勘定は何時にても所有貨幣の變動と共に變動すとの想像にあり、預金は寧ろ個人の富と共に變動す、

第三に教授は代價關係を數學的符號式に表はすに當りて誤謬をなさざりしや、予の見所によれば教授は一般に承認されたる根本的の價值觀念を否認し代價は金と貨物との比なりとなし進んで個々の代價決定前に一般的物價平準を確めざるべからずと思考せらるゝ、予は比の觀念を用ひて説明するに當り如何に一般的物價平準が金に影響する諸原因の影響を受くるやを詳細に説きたるを以て一般的平準を斟酌し然も猶價值の觀念を侵害することなかりき、されど比の觀

念によれば貨物に影響する諸勢力は一般的代價平準に影響すること既述の如し、教授が一般的物價平準より個々の代價に論及するは誤れり、予は後者は前者を算出するの基礎なりと主張するものなり。

ジョンソン教授は予が代價の比に於ける貨物の側に影響を及す諸勢力は物價に影響すと云へるは誤れりと言はれたれどもそれは恐らくは貨物の生産販賣金融等に影響すべき諸條件は物價に影響せずとの意にはあらざらん、然らずんば農産物の代價は如何にして説明せらるべきか。予は前論に於て金と貨物及その代價との關係を論じたり、我國に於ては貨物交換に金を使用すること少く従つて物價と我國に於ける交換媒介との關係は實際に省略せられたるも然も代價形成の徑路は實際上銀行による交換媒介の發生に先だつものなり。

予は某氏の云へるが如く方程式の背後に隠るゝの意思なきものなれども然も拙著『貨幣の購買力』に避難するを必要と認め、短時間内には充分に答辯し得ざる程多數の質問を受け而して之等の質問は悉く該書の中に説明されあるを以てなり、例へばタウシグ教授の指摘されたる如く過渡時代に於てはTの増進はMの増進の原因たるべきことに關しては一章を割きたり、方程式自身は何れが原因なるかを示さずと雖もPが方程式に於ける受働的の項なることは該書によりて明に知り得べし。

猶MとM'との關係の外に更に「Tの増加はそれが一人當りの増加なる限りはV及V'の増加を來す」といふ一の因果關係あり、之に就ては統計的及演繹的の證明もあり、而して貨幣數量説には何等の影響をも及ぼさず。(完)

室町時代の經濟史的事實の一端

松本彦次郎

建武中興の際後醍醐天皇は過度の土木事業を起し給ひし結果財政紊亂を來し、救濟法の一として不換紙幣を發行し給ひし事は史家の一致する所なれども經濟史の立場より之を論ずるものあるを聞かず。建武中興は王政復古にして政治上の變化には意義あるも之を經濟史上より論ずれば鎌倉及室町兩時代にまたがり文藝美術史に於ても過渡期なる如く經濟史に於ても過渡期のある期間たるに過ぎず。建武の中興は幕府の手にありし政權は再天皇に歸し奉りし點に於ては大なる變化なれども武家制度を大體に於て破壊し給はず割合に保存し給へり鎌倉時代は幕府の鎌倉にあると云ふ點よりせば一時代を劃すと雖も此時代分は幕府なる概念に餘りに捉はれたる

なり。鎌倉は大名集合の地として人家漸く殖ゑ滑川の注ぐ由井ヶ濱の方面に高家軒を並ぶるに及び幕府の法令は經濟の方面に關するもの漸く多く。貸借土倉に關する規定の如き漸く頻繁に出づるに至りしは注目に値す。從來商業地たる敦賀奈良太宰府京都の如きかなり發達せる都府たるに相違なければれども此等都府間相互の關係は交通の不便より思の外親密ならず。奈良より敦賀に物買ひに行きしなど多少の連絡なきにあらざると雖も各都府殆獨立せる姿なりと見て大過なからむ。唯關東に於て鎌倉の繁盛は政治上の中心點なりし丈京都の連絡も前代と異なり漸く多きを加へ唐物と稱して盛に太宰府武庫の外國貿易品の珍重せられ商賈の之に従事するもの出で隨て一般商人の往復も頻繁になりしならむ。(庭訓往來)

建武中興に楮幣を發行せしは信用發達の一階路と見るべきものにして此の發達は我經濟史上